

## ビリケンの命名はタフト大統領からではなかった

従来、ビリケンの顔がタフト大統領の顔に似ていた（目のつりあがった尖り頭）ことから「タフトの愛称ビリーに因んで付けられた」とされていた。しかし最近、利根運河交流館の若松文館長から、ダウンロードされたカナダの雑誌の画像を見せられた。彼女の解説では、カナダの作家の童話にビリケンが出てきて、その挿絵をフローレンス・プリッツが描いた。初めは羽を付けた子どもの姿だった（エンゼル）。その挿絵も雑誌に掲載されていた。それで、タフト大統領説は間違いである。追って翻訳します、と言っていた。

一方、評論家、編集者の山田五郎は「ビリケンの知られざる物語」で同様のことを述べている。以下にまとめると、

- 1、1896年、カナダの詩人プリス・カーメンが発表した詩の中に多くの妖精が出てくるが、その中にビリケンと言う妖精もいた。
- 2、1907年、プリッツの友人サラ・ハミルトン・バーチャルがカナダの新聞、雑誌にビリケンの出てくる詩や童話を連載して、その挿絵をプリッツが描いた。ビリケンの姿は羽のある子どもの天使(エンゼル)であった。
- 3、1908年、プリッツの描いたビリケンは現在のような姿になり、シカゴの新聞に商業広告として登場した。日本の着物を着ていたという。その東洋的な神秘さから幸福の神とされるようになった。プリッツは日本虜虜であったという。

(山田五郎の「ビリケンの知られざる物語」をネット検索してください)

## ガイドの会の対応

以上のような解説は他のネットにもある。この説はエビデンスがあるが、タフト説は今のところエビデンスがない。つまり後付けされたものと思われる。今後、ネットを見る者が増えてくことや、利根運河交流館からの情報発信を考えると、ガイドの会の解説は「タフト大統領からの命名」を解説しないのが良いと思う。